

あの日の頃 - 18

畑中里佳

目黒星美学園小学校に来て、まず目についたのが、階段の踊り場に置かれているドン・ボスコやマリア様の像でした。

私の育った小学校は、特に問題を抱えているわけではなく、それなりに落ち着いた雰囲気のある学校でした。でも、階段や廊下を走りまわる子供や、ちょっとしたいたずらをする子供もいましたので、安全面からも整備の面からも、踊り場に物を置くなどという事は考えられませんでした。ですから不思議な思いでそれらの像をながめました。

しばらく子供や学校の様子を見ているうちに、なるほど、と思いました。子供達にとって、これらの像は特別なものだったのです。決してまわりでふざけたり、ましてやいたずらなどをするものではなく、言葉には出さないけれど、心の奥で大切に守るべきものだったのです。ですから、ガラスケースのむこうにただ飾られているものではなく、子供達の生活のすぐそばにいつでも触れられる場所に置かれていたのです。

この学校で宗教というものに初めて触れた私でしたが、それまで持っていたイメージ、どこか生活から切り離された、ある威圧感を持ったものであるように考えていました。でものびのびと遊ぶ子供達、修道服のすそをひるがえしてドッチボールをするシスター、いきいきと歌う聖歌、そのどれもが、私にとっては衝撃的でした。子供達は、この学校で子供らしく過ごす中で、神様に近付いていっているのだと感じました。

また、これも宗教につながっていくのですが、「優しさ」を持っているなと感じました。授業中に、トイレを我慢しきれず失敗してしまったり、気分が悪くて、もどしてしまう子がいますが、そういう時に「だいじょうぶ?」「このティッシュ使って。」って声をかけ、後始末まで手伝ってくれる子供が何人もいました。私の子供時代でしたら遠まきに見ているか、後ではやしたてられるだけでした。星美の子は、「人のために何かしてあげよう」ではなく、「人のために何かしよう」なんだなあと思いました。

こうして、優しさのいっぱいあった学校や子供達に助けられながら、私の教師生活も何とか今まで続いています。この原稿を書いている今、新校舎の建設は着々と進んでいます。私達のために汗を流して働いてくださる竹中工務店の方々に、今年も子供達のありがとうの気持ちをのせた葉書が届いているようです。

【同窓会報、第18号・平成11年4月1日発行・から転載】